



こいでまゆ
小出真由さん
～プロフィール～

那須拓陽高校生物工学科の3年生。生き物が大好きで1年生の時に牛部に入部。以来、牛の性格や個性にすっかり魅了され、春からは畜産系の専門学校へ。「牧場経営」という夢への階段を登り始めた、笑顔がキュートな女子高生。

インタビュー

甘えん坊やきかん坊など牛の性格はさまざま。そんな中、牛とのコミュニケーションを通して「命の尊さ」や「食のありがたさ」など本当にたくさんのことを学びました。作文では、その気持ちをストレートに書きました。読んでくれた人が、私の感じた思いに共感してくれたらうれしいですね。



チャレンジing

げんきびと なすしおばら元氣人 No.21

一歩踏み出す人を
応援するまち



国産農林水産物の消費拡大を図ろうと消費者、民間企業、団体、国などが一体で進める「フード・アクション・ニッポン」。その取り組みの1つ「国産食材の感動体験エピソードコンテスト」で、オス牛・ケンケンとの思い出をつづった小出真由さんの作文が審査員特別賞に輝きました。今回は、その作文を紹介します。

命をいただくこと

私は、那須拓陽高等学校3年生で、牛部に所属しています。高校の農場には、65頭の牛がいます。牛部の活動は、主に飼養管理ですが、ホルスタイン共進会出場のために牛の調教なども毎日一生懸命行っています。

秋の収穫祭は、学校の水田でクラスごとに会食をします。学校でとれたお米や野菜のほかに、焼き肉用の肉が生徒500人にふるまわれ、皆とても楽しみにしています。その肉は、学校で生まれたホルスタインのオスを18カ月肥育して出しているのです。1年生の頃はそれほど気になりませんが、去年は正直「嫌だな」と思いました。クラスメイトから言われたことがあります。「自分たちで育てて食べるなんて、残酷じゃない？」牛部の人はよく平気だね...と。平気なわけがありません！ 去年のケンケンという牛は、元気に走り回ったり、興味津々で私たちに近づいてきたりして、とても活発な男の子でした。

毎日世話をしている牛が突然いなくなってしまうのです。屠殺のために家畜車に乗せるときには、いっぱい涙が出ました。「経済動物だから」と割り切れないし、この子を殺すのは「残酷だ」と思ってしまうのです。

収穫祭当日、バック詰めになった肉を見たときには、あの温かな体や大きな瞳を思い出して、また涙が出ました。でも、周りには笑顔がたくさんありました。クラス全員で食べるのは楽しいし、「かわいそうだから食べない」というのは違うと思います。そして、自然に手を合わせて、「いただきます」と言うことができました。

今まで食べてきた全ての食べ物にも、丹精込めて育てた生産者がいて、私たちは命をいただいて生きています。今年の牛はネイマーという名前です。この子が生きていて、できるだけ快適な環境で育てあげることが、私にできることです。この子の命で、できるだけたくさん笑顔が生まれるように。

問い合わせ 県立那須拓陽高等学校 ☎0287(36)1225

